

# 表現学会メールマガジン

第4号  
(2024年12月)



上の画像は、表現学会をイメージして生成AIで作ったものです。

## 目次

- 『表現学会』 121号投稿&第62回表現学会全国大会発表者募集のお知らせ
  - 吉村耕治先生 ご逝去
  - 会員からのリレー・メッセージ (第4回)
  - 広報委員会主催第一回オンライン例会報告
    - 令和6年 関係文献調査のお知らせ
    - 各地区例会開催のご案内と発表者募集
  - 編集後記

表現学会広報委員会

■『表現研究』121号投稿&第62回全国大会発表者募集のお知らせ

『表現研究』121号(2025年4月末日発行)の投稿の締め切りは、12月16日です。

「投稿規定」は、表現学会HPの「学会誌」のページ

(<https://hyogen-gakkai-official.org/journal.html>)

に掲載がございます。

また、2025年6月7日(土)から8日(日)にかけて、第62回全国大会が岐阜大学にて開催されます。現在、全国大会の発表者を募集しております(研究発表は、8日(日)に行われます)。氏名・所属・身分を明記の上、発表タイトルと要旨(400字程度)を書いたものを、「お茶の水学術事業会内表現学会担当」まで、郵送もしくはEメール

([exp-info@npo-ochanomizu.org](mailto:exp-info@npo-ochanomizu.org))

でお送りください。応募の締め切りは、2025年1月13日(月)必着です。

論文投稿&全国大会発表者募集についての詳細は、『表現研究』最新号あるいは表現学会HPでご確認ください。

■吉村耕治先生 ご逝去

『表現研究』第119号でお伝えした通り、2024年3月20日、長らく表現学会に所属され、理事でいらっしゃった吉村耕治先生がご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

吉村耕治先生は、1999年より表現学会の理事として、また、編集委員、監査委員として多大なるお力添えをいただきました。『表現学会50年史』によりますと、1982年の第19回全国大会シンポジウム「比喩表現に新しい光をあてる」で講師を務められました。また、2006年と2015年の全国大会のシンポジウムにご登壇され、2011年の全国大会のシンポジウムでは、司会を務められました。また、全国大会や近畿例会での研究発表(昨年秋にも近畿例会でご発表いただきました)、ならびに『表現研究』へのご寄稿も多くございました。以下に、吉村耕治先生の表現学会における主なご功績を記します。

2017年4月発行 第105号《研究ノート》

「感性を表現学的に研究する注意点—日英言語文化論の視点から—」

2015年10月発行 第102号 全国大会シンポジウム「オノマトペの〈感性〉」「日英語の比較の観点から見たオノマトペ—感性の表現の魅力—」

2011年10月発行 第94号 全国大会シンポジウム「感性と言語—日本語を中心に—」  
「感性と言語を研究する楽しみ—シンポジウムの司会を終えて—」

2006年10月発行 第84号 全国大会シンポジウム「日本語らしさと英語らしさ」「状況中心の表現と行為者中心の表現—日英語の根本的相違を探る—」

2001年3月発行 第73号「色彩表現の特性と役割」

吉村耕治氏に最後にお目にかかったのは、昨令和5年10月21日の表現学会近畿例会の席上であった。氏はこの会合で、宮沢賢治が作品中で使用した色彩表現について講演をなさった。そして、その講演の要旨が掲載された『表現研究』第119号の刊行を見ることなく、本年3月に長逝された。

吉村氏と親しく接するようになったのはそう古いことではない。吉村氏は英語学、私の方は日本語学という専攻分野の違いもあって、はじめは、表現学会の大会や近畿例会でお目にかかる顔見知り、という程度だった。ところが、十数年前から、氏が力を注いでこられた感覚表現(氏は「感性」という語を好んで用いられた)についてのシンポジウムを企画なさる際に、私に声がかかるようになった。同じく関西の私学に勤務し、近畿例会などで親しく懇談できる同世代人として親近感を持ってくださったのかと思う。私の方からも吉村氏には論文の英文タイトルや英文要旨のことなどで、相談しやすい人だった。コロナ禍が始まる前年には、氏が幹事役をなさっている英語テキスト言語学会でシンポジウムを企画し、私を講師に呼んでくださったこともあった。そんなとき、氏は英語学で語彙論的、私は日本語学でテキスト論(連文論、文章論)的な立場から発言するので、悪く言うと議論がすれ違ふところがあったが、よく言うと互いに相補うところがあって、お互いに気の置けない仲間、といった格好であった。

さて、冒頭に書いた表現学会の近畿例会のご講演であるが、吉村氏は、宮沢賢治の色彩表現について語る中で、

「東には紫磨金色の薬師佛そらのやまひにあらはれたまふ」

という短歌を取り上げられた。そして、この短歌のイメージの中で「紫磨金色」という色彩表現を用いた賢治の意図を分析されたのだが、その際、仏典に仏陀や如来の身体や尊顔の形容として、「紫磨金色」とか「紫金色」と並んでしばしば登場する「閻浮檀金」(「エンブダゴン」とか「エンブダンゴン」と読む)ということばに言及された。これは、浄土三部経などで聞いたことがあったが、どんな意味なのか、考えたこともなかった。

吉村氏は、「閻浮」は、ジャンプーという樹木、「檀」は川ということ、したがって、ジャンプーの林間を流れる川が閻浮檀ということになる。その川底から取れる金が閻浮檀金と呼ばれ、紫を帯びて美しく輝く上質の金だという趣旨の説明をされた。その時私が感じたのは、閻浮檀の「檀」が川とはどういうことだろうか、「檀」は、「梅(せん)檀(だん)」とか「白檀」とかの植物名に用いられる字だ、閻浮というのがジャンプーという樹木なら、閻浮檀は、ジャンプー樹ということではないのか、という疑問だった。

もうあれから1年経った。その間私もあれこれ調べてみた。しかし、「檀」が「川」なのか「樹」なのか、確たることは言えない、というのが現在の私の実情である。たとえば、吉村氏も参考にされた岩波文庫本の「無量寿経」の注に、「閻浮檀金」の説明として「ジャンブー(樹の大林を流れる)河より産出する金」とある。この説明を見ると「檀」が「川」だと説明されているように見えるし、吉村氏もそう受け取られたようだ。しかし、実は「無量寿経」のこの注は、「jambunada-suvarṇa」というサンスクリットに対する語釈なのである。すなわち「jambu」が「ジャンブー樹」、「nada」が「川」、「suvarṇa」が「黄金」に当たるという注釈である。「jambunada」は「jambu(ジャンブー=閻浮)」と「nada(ナダ=川)」の複合語だから、明らかに「閻浮を流れる川」の意味だ。だからと言って、にわかに、「檀」を「川」と解することにはならない。

「ジャンブー」というのは、そもそも「ムラサキフトモモ(紫蒲(ふと)桃(もも))」と呼ばれる喬木の名称らしい。それがその樹が生い茂る土地の地名になり、またそこを流れる川の名称になったのである。そしてさらにまた、そうしたことばによって書かれたサンスクリットの経典やそのチベット訳が、数百年を経た中国で、何人もの三蔵の手によって漢文訳されて残されたものを、それから1000年以上後に、われわれが読んでいるのである。したがって、その経典中の一字一句に、2000年にも及ぶ時の流れと、インド、中国、日本にまたがる空間に生きた人たちの文化、感性、思考、信仰の差異が反映しているのである。そう考えると、「檀」の一文字を「樹」だ、「川」だと簡単に決めつけることは容易ではないという気にもなる。

漢訳の仏典中で、地名や人名など固有名詞は、意味で訳される(意識)こともあり、発音によって訳される(音訳)こともある。たとえば、同じ Amitayus(アミターユス=限りない命)でも、音訳して「阿弥陀」といわれることもあり、意識して「無量寿」といわれることもある。特に音訳の場合、その漢字の意義を分析して意味をくみ取ろうとすると、とんでもない誤解をすることもある。

今問題にしている「閻浮檀」にしても、「ジャンブー」を「閻浮」と漢訳したのは音訳で間違いないだろうが、「樹」を「檀」と訳したのなら意識、「nada=川」を「檀」と漢訳したのなら音訳である。一般には、後者と取る立場が有力で、多くの辞書には、「檀」は「川」だと記述してある。あるいは、「nada=川」を「那(ナ)陀(ダ)」とか「那(ナ)他(ダ)」とか音訳した例があるから、この場合、はじめ「那(ナ)檀(ダ)」と音訳された後に「那」が脱落して「檀」だけになった、ということかもしれない。ただ、私にはそうであるという根拠が得られないでいる、ということなのである。

ここまで述べてきたことは、あるいは、仏教研究者やインド思想史、サンスクリットの専門家にとってはすでに解決済みで、問題にさえならないようなことかもしれない。ただ、先に書いた吉村氏の発言についての疑問を私なりに解消しようとして、それができていないというだけの話である。しかしまた、現在の日本においても阿弥陀如来の尊顔や身体から金光が発せられるようなイメージで仏像や仏画に接したり、仏壇の内装を金色に荘厳したりする根拠が「閻浮檀金色」ということばにあるならば、そのことばの成り立ちやイメージを追求するというのも無駄なことではあるまい

とも思う。こういうことを考える機縁を与えていただいた点で、吉村先生に感謝したいし、ここに書いたようなことを吉村氏にお話してお考えを伺おうと思っていた矢先、吉村氏の訃に接したのである。さだめし、氏は、「ようそんなこと考えるなあ」と微笑していらっしやることであろう。

(帝塚山大学名誉教授)

#### ■会員からのリレー・メッセージ(第4回)

柳澤浩哉

学会が生まれるプロセスには二つの形があると思う。一つは、新しい研究分野が開拓されて、その分野に対応する学会が必要になって生まれるパターン。もう一つは、「新しい学問領域が必要だ」と考える研究者が集まって、まだ存在しない学問領域を生み出すために作られるパターンである。

ほとんどの学会は前者であるが、表現学を構想して生まれた本学会は後者に当たる。(『表現研究』表紙裏に毎号掲載される「入会のすすめ」を参照。)ちなみに、本学会以外ではウェルビーイング学会(2021年設立)などが後者の例だと思う。

後者の学会が少ない理由は容易に想像できる。「新しい学問領域を作る」というのは壮大な夢だからである。夢を共有して学会を立ち上げること、夢を継承していくこと、どちらの大変さも想像に難くない。表現学会が60年以上存続しているのは、一つの奇跡かもしれない。

本学会の美点の一つは「会員を育てる文化」である。他の学会にはなかなか見られない稀有な文化だと思うが、本学会の設立目的を知ると、そこから必然的に生まれる文化なのだと納得できる。この文化は例えば、『表現研究』投稿者への非常に丁寧な査読コメントに現れている。

『表現研究』に投稿し、本学会の文化を実感いただく会員が増えることを願ってやまない。

(広島大学)

※次回は、長沼英二先生(明治大学兼任講師)のリレーエッセイです。

#### ■広報委員会主催第一回オンライン例会報告

2024年9月16日(月・祝)、広報委員会が主催する初めてのオンライン例会(ZOOM配信)を開催いたしました。半沢幹一先生編集の著書『直喩とは何か』にちなんだ企画で、執筆者であり、広報委員の松浦光氏、菊地礼氏、『表現研究』で著書の紹介を担当した小松原哲太先生にご登壇いただきました。

○発表題目	『直喩とは何か』で直喩を考える	
○発表者(発表順)		
	松浦光氏(埼玉学園大学)	「L‘Arc～en～Cielの歌詞における直喩」
	菊地礼氏(長野工業高等専門学校)	「ライトノベルの直喩」
	小松原哲太氏(神戸大学)	「Amazonレビューの直喩」
○司会		
	湯浅千映子氏(大阪観光大学)	「木皿泉『昨夜のカレー、明日のパン』の直喩」

当日は、50名近くの方にお集まりいただきました。比喩や認知言語学がご専門の院生や研究者の方のご参加が多かったようです。3名の先生方からは、「歌詞の直喩」・「ライトノベルの直喩」・「読者レビューの直喩」という、新鮮な切り口から一つ一つの表現を丁寧に分析したご発表がありました。肩肘張らず、和やかな雰囲気を作りながらご発表いただき、参加者との意見交換も活発になされました。司会の私自身も時に会の進行を忘れるほど愉しむことができました(司会の私からも脚本家・木皿泉の小説の直喩を少しご紹介しました)。例会終了後の参加者インタビューでは、「丁寧に誠実な(しかしある意味でフランクな)例会であったと思います」というご意見を頂戴し、まさにこの言葉通りの会を作っていきたいという思いを強くした次第です。

次回は、3月末に直喩をテーマにした第二弾のオンライン例会の開催を予定しております。オンライン例会が地区例会の次の新たな交流の場として、定着していくことを願っております。ぜひご参加ください。(湯浅千映子)

#### 【広報委員より 例会を終えて】

オンライン例会は初めての試みで、正直どうなることかと不安でもありました。それでも、実際に開いてみると、50名以上の参加者が集まっただけではなく、質疑応答も活発に行われ、魅力的な企画になったと思いました。この会では、全国の会員の皆さんだけではなく言葉に関心のある方々の交流の場として、地域や分野を越えたボーダレスな活動を行っていきたいです。例えば、今回のオンライン例会に感じた、トークライブのような気軽さで参加できる場作りを心掛けています。これからも、皆さんからのこんな企画をやりたい、こういう話が聴きたいに伝えていきたいです。オンラインで、表現学会だからこそ、実現できる自由な場を作っていくことを目標にしています。(松浦)

表現学会の大きな特徴として地区例会の活発さが挙げられます。一方で、東京・近畿・名古屋近辺にお住まいでない方にとっては、なかなか地区例会への参加が難しいというのも現状としてあったと思います。オンライン開催の何よりのメリットは参加のしやすさであり、今回も直喩というニッチなテーマでしたが、50名を超える方にご参加いただけました。今後も表現学会の会員、も

しくは学会に関心を持たれる方が気軽に集える場としてオンライン例会を開くことができればと思います。(菊地)

### 【当日の発表内容】

#### ○小松原哲太氏(神戸大学) 「Amazon レビューの直喩」

インターネットでクチコミを投稿するレビューは、さまざまなレトリックの技術を駆使して、コンテンツの評価や閲覧者の印象に影響を与えている。直喩はその1つである。Amazon.co.jpで2024年8月現在売り上げ上位の翻訳小説であるガルシア＝マルケス『百年の孤独』(新潮社, 2024年)のレビューを対象として、直喩の用例を観察した。文体、物語、読書体験を少ない字数で簡潔かつ印象的に述べる直喩や、他作品との比較による類推を喚起する直喩は特に興味を引く用例であった。レビューの文章は、閲覧者の購買行動に影響を与えるという明確な目的と結びついたジャンルであり、このようなレトリックの具体的なジャンルとの関係で直喩の用例を分析することで、直喩のコミュニケーション機能の特性を明らかにすることができると考えられる。

#### ○松浦光氏(埼玉学園大学) 「L'Arc～en～Cielの歌詞における直喩」

歌詞の表現の研究については、野田(2021)では日本語学の立場から歌詞における楽曲的な制約や作詞者の意図などに起因する文法的な逸脱がまとめられている。また、認知言語学の分野をみると、Lakoff and Turner(1989)を嚆矢とする詩的メタファーの研究も歌詞について考える手がかりとなり得る。しかしながら、未開な部分が多く、特にロックやラップなどジャンルに絞ったもので、直喩に注目した研究は皆無に等しい。そこで、本発表ではロックバンドL'Arc～en～Cielの歌詞をデータとして、直喩を中心に比喩表現についてみていき、観賞を行った。L'Arc～en～Cielの歌詞では、複数の比喩表現が折り重なることで、想像力を掻き立て、多様な効果を生み出すことを論じた。

#### ○菊地礼氏(長野工業高等専門学校) 「ライトノベルの直喩」

ライトノベルに資料を限定して直喩を収集し、それらの用例を観察することで、直喩研究の進み得る可能性について述べた。ライトノベルにおいて直喩は、ヒロインの容姿や行動の描写に偏って用いられる。慣用的・クリシェ的な直喩を用いて、ヒロインの美しさやかわいらしさを強調するのである。ヒロインを魅力的に造形する言語的な資源の一つと言える。一方で、このような現象は、特定の表現技法(ここでは直喩)が特定の性の表現に偏っているということもできる。そこにはライトノベルの受容層の持つ「女性に期待・要求している『女性像』」(宇佐美 2005)が反映されていると見ることができる。これは直喩という表現を解釈・吟味する上では、媒体の性質、受容層、供給層といった文章外の要素も含めて考える必要があることを示唆する。テキストにおける

表現と社会等の関係を考えるという点では批判的談話分析(Critical Discourse Analysis)につながる可能性がある。

#### ■令和6年 関係文献調査のお知らせ

表現学会会員の方々の業績を『表現研究』第121号へ掲載いたします。

2024年1月から12月までにご発表になった著書名および論文名をご報告ください。  
(表現研究に関わりのある著書および論文に限ります)

表現学会HPのトップページ「お知らせ」の「関係文献調査はこちらから」をクリックし、  
「表現研究 令和6年関係文献調査」

(<https://hyogen-gakkai-official.org/survey.html>)

の専用フォームにご記入ください。

締切は、2025年1月末です。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

#### ■各地区例会開催のご案内と発表者募集

地区例会(東京・名古屋・近畿・広島)開催の情報については、  
表現学会HPの「地区例会」のページ

(<https://hyogen-gakkai-official.org/tiku.html>)

をご覧ください。また、担当者への連絡(発表希望など)については 同ページ「地区例会連絡フォーム」をご利用ください。

#### ■編集後記

3歳になったばかりの姪っ子。玄関先で砂利の中から丸い石ころを見つけては並べ、「チョコレートみたい」と話していました。こんなに幼い頃から直喩を使いこなし、豊かな表現を身に付けていくのだなど、小さな子どもの観察力や表現力を育む姿に、感心しました。(湯浅)

今年度から新任教員として今の職場に着任しました。新たに、中高の国語科教員の養成にも携わっています。学生たちと国語教材の『山月記』や『羅生門』を読み返しているのですが、レトリックの宝庫です。一つ一つの表現にこだわった国語の授業を一緒に考えていくのが楽しいです。  
(松浦)



今年度より長野に移り住むこととなり、生活・研究環境が一変しました。住む分には良い土地なのですが、関西方面への交通手段が乏しいので今年の学会シーズンは大変でした。(菊地)

\*\*\*

広報委員3名で今号よりメールマガジンの内容をボリュームアップして、8ページにもわたるニュースレター形式のPDFファイルでお届けしました。表紙のデザインも表現学会のイメージに合うよう、こだわってみました。いかがだったでしょうか。このたび寄稿いただいた柳澤先生、中島先生、小松原先生にこの場を借りて御礼申し上げます。

今後も会員の皆さまに親しんでいただけるよう、コンテンツ作りに努めてまいります。メールマガジンで取り上げてほしい企画やメールマガジンを通して伝えたい情報・メッセージなどがございましたら、ぜひ表現学会メールマガジン専用アドレス  
([hyogen-magazine@hyogen-gakkai-official.org](mailto:hyogen-magazine@hyogen-gakkai-official.org))  
までお知らせください。

(文責 表現学会広報委員会)

誌名：表現学会メールマガジン 第4号

発行日：2024年12月

発行者：表現学会広報委員会

発行所：お茶の水学術事業会内 表現学会担当  
表現学会HP

<https://hyogen-gakkai-official.org/>

※配信停止・配信先変更については、  
表現学会事務局

[exp-info@npo-ochanomizu.org](mailto:exp-info@npo-ochanomizu.org)

にお知らせください。

